

論文の内容の要旨

論文題目 母親の出産時心的外傷がボンディング困難性に与える影響

氏名 末次美子

序文

出産時心的外傷を抱える母親は、心的外傷後ストレス障害の症状により、出産した子どもへのボンディングの困難性へ影響を及ぼす可能性がある。また、出産後持続する心的外傷後ストレス障害の症状は、出産後3か月時点でのボンディング困難性を予測する可能性がある。本研究の目的は、正期産の母親を対象として、出産時心的外傷とボンディング困難性の関係を検証することである。

研究デザイン

本研究では、まず【研究1】において、日本語版PBQの信頼性・妥当性の検証と因子構造を探索するために、横断的関連検証・因子探索研究を行い、次に【研究2】において、母親の出産時心的外傷とボンディング困難性との関係について検証するために、縦断的仮説検証研究を行った。

【研究1】では、日本語版PBQの信頼性・妥当性を検証するため、正期産で健常児を出産した母親を対象に、出産後1か月時点でリクルート・質問紙調査を行い、日本語版PBQと他概念を測定した質問紙との関連から妥当性を検証し、日本語版PBQの内的整合性を確認し信頼性を検証した。また再テスト法にて信頼性(安定性)を検証するために、調査から2週間後に日本語版PBQの再調査を行った。更にPBQの探索的因子分析を行い、短縮版日本語版PBQを作成し、日本語版PBQと同様に信頼性・妥当性の検証を行った。

【研究2】では、母親の出産時心的外傷とボンディング困難性との関係を検証するため、正期産で健常児を出産した母親を対象に、出産後1か月時点と出産後3か月時点にて、質問紙調査を行った。まず出産後1か月時点の出産時心的外傷とボンディング困難性との関係を重回帰分析にて検証し、次に出産後3か月時点のボンディング困難性に対する出産後1か月時点における予測因子を検証するため、階層的重回帰分析を行った。

【研究1 日本語版PBQ (Postpartum Bonding Questionnaire)の信頼性・妥当性の検証と短縮版日本語版PBQの開発】

目的

本研究の目的は、1.日本語版PBQ (Postpartum Bonding Questionnaire)を作成し、日本語版PBQの信頼性・妥当性を検証すること、2.日本語版PBQの因子構造妥当性の検証による短縮版の日本語版PBQを作成し、その信頼性・妥当性を検証することである。

方法

2012年7月から9月に、年間分娩件数700例程の産科医院2施設においてリクルートを行った。妊娠37

週以上 42 週末満で子どもの出生体重が 2500g 以上 4000g 未満の母親を対象とし、多胎児や先天性疾患のある子どもの母親は除外した。研究説明および同意取得の際には、対象者の自由意思を尊重し、同意後の同意撤回の権利を保障した。本研究は、東京大学大学院医学系研究科・医学部の倫理委員会(受付番号：3822)及び調査施設の臨床研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

PBQ は、Brockington(2006) らが母子関係性障害(ボンディング障害)を評価するために開発した自記式質問紙である。尺度構成は、Scale1 阻害された絆(12 項目)、Scale2 拒絶と怒り(7 項目)、Scale3 育児不安(4 項目)、Scale4 虐待リスク(2 項目)の 4 因子構造で、25 項目 6 件法である。Brockington の許可を得て日本語版 PBQ を作成し、パイロットテストを経て再翻訳し、意味内容の妥当性について Brockington の承認を得た。

構成概念妥当性の検討には、日本語版あかちゃんへの気持ち尺度(Mother to Infant Bonding Scale; MIBS)と日本語版母親の愛着尺度日本版(Maternal Attachment Inventory; MAI)を用い、PBQ と MIBS とは正の相関、MAI とは負の相関が認められたときに実証されると考えた。基準関連妥当性の検証には、日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票(Edinburgh postpartum depression scale; EPDS)を用い、PBQ と EPDS との相関が中程度から高いと実証されると考えた。既知集団妥当性の検討には、初産婦群/経産婦群、EPDS 陽性群/陰性群において PBQ 得点を比較し、初産婦が経産婦に比べて高く、EPDS 陽性群が陰性群に比べて高いときに実証されると考えた。信頼性検証のため、PBQ の内的整合性について、総得点・各スケール得点について検証した。また再テスト法による test と retest における PBQ 得点の相関と平均値の差を確認した。母親の人口統計学因子については、年齢、婚姻状況、経済的状況、教育歴、職業、産科的因子については、分娩歴、不妊治療、分娩様式、出血量、授乳方法とし、子どもの出生時情報については、在胎週数、出生体重、性別、について自記式質問紙を用いて調査した。PBQ の因子構造の検証では、重み付け最小二乗法とプロマックス回転により、探索的因子分析を行った。固有値が 1 以上の因子を抽出し、因子負荷量 0.35 以上の因子を採用とした。有意水準は両側 5%とし、解析には SPSS21.0 for Windows を用いた。

結果

研究参加へのリクルートをした 300 人のうち、同意が得られたのは 292 人(97.3%)、Time1 調査の返送者のうち欠損値のあるものを除外すると 244 名(81.3%)となった。retest の返送者のうち欠損値のあるものを除外すると 199 名(77.5%)となった。

25 項目版 PBQ において、内的整合性・再テスト法において信頼性が検証され、構成概念妥当性・基準関連妥当性・既知集団妥当性によって妥当性が実証された。次に、探索的因子分析にて 4 因子 14 項目が抽出され、4 因子はそれぞれ、「阻害された絆(factor 1)」、「拒絶と怒り(factor 2)」、「育児不安(factor 3)」、「愛情の欠如(factor 4)」と名付けられた。14 項目版 PBQ においても、内的整合性・再テスト法において信頼性が検証され、構成概念妥当性・基準関連妥当性・既知集団妥当性によって妥当性が実証された。

考察

本研究において、出産後 1 か月の母親を対象に、「阻害された絆」「拒絶と怒り」「育児不安」「虐待リスク」の 4 因子から構成される 25 項目版 PBQ の信頼性・妥当性が実証された。また 25 項目版 PBQ の探索的因子分析により、「阻害された絆」「拒絶と怒り」「育児不安」「愛情の欠如」の 4 因子から構成される 14 項目版 PBQ が抽出され、その信頼性と妥当性が実証された。

25 項目版は、ボンディング困難性の国際比較や、虐待リスクを含めた臨床的査定の意義があり、14 項目版は、25 項目版に比べて簡易であり、また「愛情の欠如」の概念を含めたボンディング困難性の査定に有効である可能性がある。

結論

本研究において、出産後 1 か月の正産期の母親を対象に、25 項目版 PBQ および 14 項目版 PBQ の信頼性と妥当性が実証された。

【研究 2 正産期の母親の出産時心的外傷がボンディング困難性へ与える影響】

目的

本研究の目的は、1.正産期の母親の、出産後 1 か月時点における、出産時心的外傷とボンディング困難性の関係を明らかにすること、2.正産期の母親の、出産後 3 か月時点におけるボンディング困難性への、出産後 1 か月時点での予測因子を明らかにすることである。

仮説

本研究の仮説は、1.正産期の母親において、出産後 1 か月時点では、出産時心的外傷が高い方がボンディング困難性は高く、出産時心的外傷はボンディング困難性の関連要因となる、2.正産期の母親において、出産後 1 か月時点の出産時心的外傷は、出産後 3 か月時点におけるボンディング困難性への予測因子となる、とした。

方法

2012 年 7 月から 9 月に、年間分娩件数 700 例程の産科医院 2 施設においてリクルートを行った。正産期で子どもの出生体重が 2500g 以上 4000g 未満の母親を対象とし、多胎児や先天性疾患のある子どもの母親は除外した。研究説明および同意取得の際には、対象者の自由意思を尊重し、同意後の同意撤回の権利を保障した。本研究は、東京大学大学院医学系研究科・医学部の倫理委員会(受付番号：3822)及び調査施設の臨床研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

ボンディング困難性は 25 項目版 PBQ(PBQ25)/14 項目版 PBQ(PBQ14)、出産時心的外傷の程度は日本語版の改訂版出来事インパクト尺度(Impact of Event Scale-Revised; IES-R)、抑うつ程度は日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票 Edinburgh postpartum depression scale; EPDS)、母親の性格特性は State-Trait Anxiety Inventory の Trait(STAI)、アタッチメント特性は Relationship Questionnaire(RQ)、家族機能は Family APGAR(FA)、母親の人口統計学因子については、年齢、婚姻状況、経済的状況、教育歴、職業、産科的因子については、分娩歴、不妊治療、分娩様式、出血量、授乳方法とし、子どもの出生時情報については、在胎週数、出生体重、性別、について自記式質問紙を用いて調査した。

目的 1 では、出産後 1 か月時点の PBQ25/PBQ14 の総得点及び下位尺度得点を従属変数とし、階層的重回帰分析を行った。目的 2 では、出産後 3 か月時点の PBQ25/PBQ14 の総得点及び下位尺度得点を従属変数とし、出産後 1 か月時点の変数を独立変数として、階層的重回帰分析を行った。各 Step における標準化偏回帰係数、有意確率、自由度調整済み重決定係数を算出した。多重共線性を考慮するため、独立変数間の相関を確認し、Variance Inflation Factor の値が 2.0 を大きく超えないように調整した。有意水準は両側 5%とした。解析には、SPSS21.0 for Windows を用いた。

結果

研究参加へのリクルートをした 200 名の内、同意が得られたのは 190 名(95%)、出産後 1 か月時点の返送者のうち欠損値のあるものを除外すると 144 名(72%)、出産後 3 か月時点の返送者のうち欠損値のあるものを除外すると 130 名(65%)であった。

出産後 1 か月時点の PBQ25/PBQ14 を従属変数とした重回帰分析では、IES-R は有意な標準化偏回帰係数

であった。出産後 3 か月時点の PBQ25/PBQ14 を従属変数とした重回帰分析では、出産後 1 か月時点の IES-R は有意な標準化偏回帰係数ではなく、出産後 3 か月時点の PBQ25/PBQ14 を最も予測する因子は出産後 1 か月時点の PBQ25/PBQ14 であった。

考察

本研究結果より、出産時心的外傷によりボンディング困難性を抱きうること、そして出産後 1 ヶ月時点で出産時心的外傷が高い母親は出産後 3 ヶ月時点においても持続する可能性があることが示された。ボンディング困難性への支援には、出産時心的外傷へのアプローチが効果的である可能性が示唆される。

結論

出産後 1 か月時点の産時心的外傷は、ボンディング困難性の関連要因であった。出産後 1 か月時点の産時心的外傷は、出産後 3 か月時点のボンディング困難性の予測因子ではなかった。出産後 3 か月時点のボンディング困難性の主な予測因子は、出産後 1 か月時点におけるボンディング困難性であった。